転生in恋姫!

ARIKUI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生ｉｎ恋姫！

【Ｎコード】
Ｎ７９２１Ｏ

【作者名】
ＡＲＩＫＵＩ

【あらすじ】
恋姫の二次創作です。駄文ですがよろしかったら見てください。
転生でオリ主、チートで進めて行きたいと思います。
あと原作のキャラが崩壊してると思うので嫌な人は見ないほうが・・

プロローグ（前書き）

よろしくおねがいします。

プロローグ

突然ですが今、俺は真っ暗な部屋?空間?にいます。そして目の前にはなにやら羽の生えた俺と同じくらいの青年が・・・・・・土下座をしています。

「すいませんでしたぁぁぁぁ！」

なぜか謝り続けてます。・・・・誰か助けて。

「え～と、どういうことなんですかこれは?」

やっとの思いで俺はその青年に声をかけた。

「実はこちらの手違いであなたは死んでしまったんです。」

何だと・・・・・・・・

「何?俺死んだの?」

「そうっす☆」

軽ッッッッ！俺はとりあえずそいつにアイアンクローをかけた。

「な、なかなかっす・・・・・すいません許してください。」

反省の色が見えたので許してやった。

「はぁ・・・・で、お前は何なんだ？」

「ぼくは一応ですけど神なんですよ・・・・・・別に信じなくても良いですよ・・・別に」

大切なんだろうなぁ、二回言いました。

「俺はこれからどうなるんだ？あの世にでもいくのか？」

とりあえず起きてしまった事は仕方がない。順応性を高めよう。

「いや、それだと悪いので転生してもらおうと思います。場所はこっちで適当に決めますね。」

決めんのかい・・・はぁまぁいいか。

「何か能力自由につけられますけど、どうしますか？いくらでもいいですよ」

なに、チートの存在になれるのか。

「はい、そうっす。」

おぉう、心を読まれた。

「じゃあ、存在を最強にして、頭も良くて物覚えもいい、それで容姿は中の上くらいでいいや。」

「わかりました。じゃあ早速逝ってもらいます。」

「字が違うぞ、まぁいいや、ところでどんな世界なんだ？」

「はいあなたの部屋につまれたゲームの一番上のやつで恋姫なんとかってとこの世界です。」

「恋姫か、死ぬ確立高っ！」

でもいいやおもしろそうだし。

「じゃあいってらっしゃいっす。ちなみに生まれたときからスタートなので精神年齢１６歳の赤子のできあがりっす」

「なっおい！ちょっと待・・・・・・・・・！」

急に下に落ち始めた。　　なんでさ・・・・・

そして俺が目を再び覚まして見たものは、見慣れない天井だった。

プロローグ（後書き）

感想お願いします。
短くてすいません。

1話（前書き）

よろしくお願いします。

１話

「あぅ・・・（声が出せないｏｒｚ）」

俺は焔家の子として生まれたようだ。精神年齢は１６歳☆

どうやらこの家は武家の家系らしい、父はこの村でも1、2を争う猛者らしい。そして母は今は違うが、昔は文官の仕事をしていて、とても頭の回転が良い。この二人の間に生まれた俺は当然回りにすごい期待された。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

俺は今2歳になった、手抜きじゃないよ、別に書いてもつまらないでしょ？

俺はすでに立って走れるようになり、言葉も普通に話せている、周りからは神童とよばれるくらいに父と母の期待に答えられるくらいにスクスクと育った。そして俺はもう今のうちから己の武を鍛えておこうと父に稽古をしてもらえるように頼んだ。父はとても驚いていたが嬉しそうに笑い引き受けてくれた。

俺がこちらに来て一番驚いたのは、なんと趙家が同じ村にあることだ、そして趙雲は俺の１つ下だった。

それは置いといて今俺は父が良く使う稽古場に来ている。

「この中から使いたい物を選びなさい。」

そういって父が渡してきたのは、木製の武器の数々、俺はどの武器にしようかとても迷った。
俺の中でＦａｔ〇の弓兵が使っていた双剣の干将・莫耶がとても印象強かったので、双剣を使うことにした。

そして父と打ち合いを始めた、始めは父の打ちについていけず、剣をはじかれてばかりだったが、しばらくするとコツをつかみ、手加減してはいるが父と打ち合えるようにまでなった。おれのチート体には良く驚かされる。父も一日でここまでの成長をした俺にとても驚いていた。

そんなこんなで俺が父と稽古を始めて４年、俺は本気の父とも互角に闘えるほど成長していた。

「お前は本当にすごいなぁ、その歳でここまでの成長をするやつは見た事がないぞ。」

父も母もそれ以外の人もとても驚いていた。そしてある日俺は趙家に連れて行かれた。

「やぁ久しぶり、この子がうわさの君の子かい？」

趙雲の父らしき人と趙雲が迎えてくれた。

「あぁそうだ、ほら自己紹介しなさい。」

「はい父上、わが名は焔、性は徳、字は洸灼、よろしくです。」

はいやっと皆様に私の名前を打ち明けられました、こちらの世界に

来て俺は
名を焔、性を徳、字を洸灼、真名を皇、とつけられた。
「はいよろしく焔徳君、ほら星も」
「わが名は趙、性は雲、字は子龍。」
「じゃあ、しばらくこの子を頼むよ。いい子にするんだよ皇。」
どうやら俺はしばらくこの家に厄介になるらしい・・・・・・・・・・・・
は！？
「父上初耳ですぞ！？」
「はっはっは！気にするな、じゃあな」
強引に流され、父は行ってしまった。
「あはは、さすが焔家、愉快な家族だ。焔徳君どうか星と仲良くしてくれ、」
苦笑いしながらも俺を迎えてくれた。
「ところで、早速お手合わせ願いたいんだがいいかな？」
わぁお、趙雲のお父さんとまさかの手合わせ、もうどうにでもなれ
「イイデスヨ」
「なぜ片言なんだい・・」

そんなことがありつつ、俺は手合わせをした、相手が使うのは槍、リーチがある。
しかし俺は度々勝手に父と一緒に賊を退治しにいっていたので対戦経験はあった。

「ではいきます！」

そういい俺は思い切り踏み込んだ。

シュッ！キンッ！ガッ

始めの一撃が予想以上だったのか表情を変え、真剣になった。

「はぁ！」

「おぉぉぉぉぉ！」

趙さんはやはり父とは全くスタイルが違った、村の人はよく　力の焔、俊の趙。といっていたが、まさにそのとおりだった、父ほど打ちは強くないが手数がまったく違った。

そして俺はその後2時間近く手合わせをした。

「やぁやっぱり強いな君は、親を抜くんじゃないかい？」

「ありがとうございます」

褒められたので素直に礼を言った。一緒に来ていた趙雲が

「すごい！父上とあそこまで打ち合うなんて！」

感激の様子だった。

「いやぁうちの子も稽古しているんだがね、君にはまだまだ追いつけないよ、これでも才はあるとおもうのだがねぇ」

おれはずるしてるからいいの！

「俺が例外過ぎると父や母はいっていました」

「そうだな私もそう思うよ、改めてよろしく」

「はい。」

そうして俺の趙家での生活が始まった。

趙雲パパとの手合わせ以来、趙雲は俺に真名を預けてくれた、俺も喜んで真名を預けた。

今、俺は一人で稽古をしている。趙雲パパは仕事で忙しいため、今日は一人だ。

俺が今行っていることは、木にいくつも紐をたらし、それにまな板くらいの木をしっかりと結びつけ、それをかわしたり、剣でうったりしている。数は二十以上、もはや人間ではない、もう父は越したな。これは対大人数のときに使えるように俺が考えたものだ。しばらくやっていると人の気配がした。

「だれ？」

俺は動きを止め気配のするほうに振り返った。そこには星がいた。
どうやら俺にこっそりついてきていたらしい。

「皇兄、私も一緒にやってもいいか？」

上目遣い！！くっこれは反則だ！

「あぁちょっと待ってろ。」

速攻で折れた俺は、星用に少し数を減らし木よりは軽い竹で同じようなものを作った。

「じゃあ星やってみろ」

「はい皇兄。」

皇兄とは俺が星に真名を預けてから星がそう呼ぶようになった。

「はぁ！」

カンッ！カカンッ！

やっぱりさすが趙雲、周りが見えてるな、初めてなのに結構続いている、あっ。

「痛っ」

集中力が切れ、星の後頭部に竹があたった。あれは痛そうだ。

「うぅ～皇兄～」

今度は涙目&上目遣い！やめろ！俺を殺す気か、かわいすぎるぞ。

「よしよし。」

俺はそういって星を撫でる。

「へへ／／／」

星はうれしそうに目を細めた。うう～お持ち帰りぃ！・・・・・イカンイカン

「星よくできてるよ、後は続けて集中が長くなれば大丈夫だ」

「ほんと！じゃあがんばる！」

星はそういいまたやり始めた。まぁ続くようになったら竹の数増やせばいいか。まだ5個だし。

そうして俺は父が帰ってきてからも星と訓練をした。

そして3年が経った。俺はもう村で余裕の一番、星は俺の次というくらいまで強くなった。
そして俺は旅をする決意をした。

1話（後書き）

あいかわらず駄文ですね。
感想よろしくお願いします。

2話（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします。

2話

俺は今、鍛冶屋に来ている。これから旅に出るため、武器を作ってもらいに来た。

「おじさん、いる？」

「あぁ焔さんとこの子じゃないか。どうしたんだい？」

「こんな武器を作って欲しいの。」

俺は9年間コツコツと貯めてきたお金を出した、言えないがかなりの量だ、もちろん旅にいくぶんの量も確保してある。鍛冶屋のオッチャンは俺が出した額に驚愕していた。

ちなみに俺が頼んだのは日本刀のような細い刀2本だ。ちなみに色は黒にしてと頼んでみた。

「このお金全部使ってでも飛び切り頑丈な、最高のやつにして。」

「おぅ、まかせろ1ヶ月で完成させるから待ってろよ。」

「わかった。」

1ヶ月か、結構長いな、まぁ馬の問題とかもあるしいいか。

2週間くらい経ち、俺は鍛錬の休憩として、小川に来ている、しばらくボーっとしていると森のほうからガサガサと音を立てて何かが出てきた。俺は狼かと思い、構える。だが出てきたのは狼ではなく、立派な青に近い毛をした馬だった。

俺は構えを解き、その馬に見惚れていた。馬もこちらを見たが別に危害がないと分かり水を飲んでいた。

しかしその後ろから5匹の狼が現れた、俺はすでに走り出していた。しかし

バキッ！

その馬は狼たちを蹴り飛ばし応戦していた。

（すげぇ）

俺は素直にそう思った。

しかし一度に5匹の相手はさすがに無理で1匹の狼が馬に飛びかか

ろうとした、しかしおれがそれを許さなかった。すばやくその狼の前に立ちはだかり、殴り飛ばした、そして

ギンッ！

思い切り殺気立てて狼を睨みつけた。狼たちは勝てないと思ったらしく、逃げていった。

「ふぅ、良かったな、気をつけろよ、」

俺は青毛の馬にそういって立ち去ろうとした、が・・・

ガシッ

馬に服を銜えられ止まらされた。おぉうせっかくカッコよく去ろうとしたのに・・・

馬は俺をしっかりと見ていた。

「俺のところに来るか？」

冗談で聞いてみた。

すると何と馬は頷いた！

これで馬の心配もなくなった、後は武器の完成を待つだけだ。

あの後馬を連れて家に戻ったら父がとても驚いていたが、飼うことを許可してくれた。そして

「父上、俺旅に出ようと思います。」

俺は父に告げた。

「・・・・・そうか、いつ出るんだ。」

ｏｒｚ寂しがってもくれねぇ。

「あと3週間位したら、」

「そうか趙さんのところにも行っておきなさい。」

「はい、分かりました。」

そういい俺は家を出て、趙家に向かった。

「そうか洸灼君もそんなことを考える年になったか。」

「やだ！皇兄！絶対にやだ！だったら私も行く！。」

現在趙家、趙雲パパは落ち着いて聞いてくれた、しかし星は聞いたとたん泣き出してしまった。

「星、無茶を言うんじゃない。」

「父上私も旅に出る！」

星は目に涙を浮かべ、訴えてくる。

「星、お前は人を殺したことがあるか。」

趙雲パパが静かに言った。

「えっ！」

星は固まってしまった。

「お前にはまだ旅は早い。」

星は頷かざるをえなかった。

「星、もっとよく考えて。もっと強くなったらだ。」

俺がそういうと、

「・・・・・・分かった。」

かなり寂しそうに行った。

「じゃあ俺は3週間後出ると思うので、」

そういって趙家に別れを告げ、出て行こうとすると、

「皇兄！」

星がこちらに走ってきた。

「どうした。」

「あの私もっと鍛錬して強くなるから、そしたら皇兄と一緒に旅をしてもいい？」

星が聞いてきた。

「あぁ構わないよ、だけどもし俺と星が敵同士だったら俺を殺す覚悟は出来るかい？そういう面でも強くなってから旅をすると良いよ。」

俺はそういってその場を離れた。

2話（後書き）

次もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7921o/

転生in恋姫!

2010年11月18日02時11分発行